「地の果てまでの救い」
使徒言行録 13 章 42－52 節

パウロとバルナバの福音を聞いた人たちは、「集会が終わってからも語り合う」くらい感銘を受けました。おそらくこの人たちは、まじめに忠実に律法を守ろうとして信仰生活をしていたことでしょう。だけど、それでも自分は義とされ得ないという不安もあったのではないでしょうか。でも、そのような時に、神さまが自分を義としてくださることを知らされ、救いの確信を持つことが出来たのです。その良き知らせに、この人たちはどんなに喜んだことでしょう。そして、彼らはもう一度聞きたい。ほかの人たちにも聞かせてあげたいと思いました。そこで、次の安息日にも同じことを話してくれるようにと頼んだのです。

ところが次の週、先週とは一転して騒動が起きることになります。次の安息日にも同じ話をしてくれって頼んでいた人たちが、今日になったら反対したというのです。ではなぜ、彼らは反対したのでしょうか？その原因は、この群衆を見て、ねたみに燃えたからとあります。

先週集まっていたのは、ユダヤ人とユダヤ教を信じる人たちでした。今週はそれに加えて異邦人たちも大勢集まってきました。すると、ユダヤ人たちは、異邦人たちのことをねたましく思ってしまったのです。この福音は、先週は良かったのです。なぜなら、みんな同じ立場にいる人たちだったからです。みんな礼拝を守って、律法も守ることに努力して信仰生活を送っている人たちだったから。だけど、そのような生活を心がけていても欠けはあります。でも、その自分たちをイエス・キリストは救いに与らせてくださる。そのことに喜んだのです。だけど、あの異邦人たちも自分たちと同じ救いに与れると言われた瞬間に、彼らは、そのことを受け入れることが出来なくなってしまったのです。「まじめに信仰生活をしている自分たちと、あいつらが同じわけがない！」そう思ってしまったのです。

そんな彼らに向かって、パウロとバルナバは語ります。「神の言葉は、まずあなたがたに語られるはずでした。だがあなたがたはそれを拒み、自分自身を永遠の命を得るに値しない者にしている。見なさい、わたしたちは異邦人の方に行く。主はわたしたちにこう命じておられるからです。『わたしは、あなたを異邦人の光と定めた、／あなたが、地の果てにまでも／救いをもたらすために。』」（46-47）。

これは感情的になって、「あなたたちが受け入れないのであれば、私たちは話を聞いてくれる異邦人の方に向かう」といったような捨て台詞ではありません。元来ユダヤ人たち、イスラエルの民は、アブラハム以来、いつも神さまの恵みの中心に置かれていました。アブラハムが神さまに選ばれたのは、神の祝福の源とさせるためでした。アブラハムを通して、また彼の子孫を通して、神さまは、その恵みを広めようとしたのです。ユダヤの人々は、このことのために選ばれた民でした。彼らには、神さまの御業を宣べ伝えるという使命が与えられていました。そのために、彼らは、ほかのどの民族よりも先に神さまの恵みに与ってきたのです。それなのに、異邦人の救いをねたむ、異邦人の救いを受け入れないというのであれば、それは、自分たちに与えられている神の救いをも受け入れないということになってしまいます。そのことは、彼ら自身が神さまを拒んで「自分自身を永遠の命を得るに値しない者にしている」ことでもあるのです。

そんな彼らに向かってパウロは語ります。「救いの恵みを受けたあなたたちユダヤ人は、まだこの福音を知らされていない人たちにとっての光となっていることを忘れないで欲しい。そして、どうかその救いの喜びを、光を消すことなく地の果てにまで届けてほしい。そう神さまは願っておられる。だから、私たちは救いをもたらすために異邦人の方に向かう。」そうパウロは言うのです。

今日の箇所で、聖書は「永遠の命を得るように定められている人は皆、信仰に入った。こうして、主の言葉はその地方全体に広まった。」(48-49)と言います。

一見すると、このことは、神さまが誰を救うか、滅ぼすかを既に決めていて、私たちはその神さまが決めた定めに従って救われたり滅びたりする、というようにも読めなくもありません。しかし、神さまが、永遠の命を得るように定めていない人なんているのでしょうか。神さまは、独り子を与えられるほどに世を愛されるお方です。イエス・キリストは、私たちすべての人のために救いの御業を成してくださったお方です。それなのに、神さまが救う人と滅ぼす人とを定めているなんてことは、果たしてあり得るのでしょうか。

この「永遠の命を得るように定められている人」の「定める」という言葉には、「整える」とか「計らう」という意味があります。私たちは、いつどこで、どんなタイミングで信仰に入れられるかはわかりません。だけど、神さまが、私たちが永遠の命を得ることが出来るように、すべてを整え、計らって、導いてくださっている。だから、私たちはそれに応答し、信仰に入ることが出来るのです。その全面的な神の導きと恵みによって自分が救われている、そのことが「神が救いに定めてくださった」という言葉で表現されているのではないでしょうか。

ピシディアでのパウロたちの伝道は、決して大成功とはいきませんでした。だけど、そのような中で、神さまの福音の波はじわじわと広められていったのです。私たちは、この神さまの御業に希望を持つのです。